

④ヒトラーの眷属たち

オットー・アドルフ・アイヒマン（1906年～1962年）



ナチ党をヒトラーと共に率いていた眷属たちのうち、わたしたちの世代には何といても同時代感・実在感のあるのがアイヒマンだろう。第二次世界大戦後、彼はアルゼンチンで逃亡生活を送っているところを、1960年にイスラエルのモサド（諜報特務庁）によって拘束され、イスラエルに連行された。1961年世界中が見守る中、裁判にかけられて死刑判決が下され、翌年6月1日未明に絞首刑に処されている。

テレビ時代が到来するまで逃亡・潜伏していたため、わたしはまだ小学生だったがテレビニュースで繰り返し報道された裁判風景などを今でも思い浮かべることが出来る。アイヒマンの被告席は防弾ガラスで囲まれていたことに驚いたものだ。

しかし、彼は親衛隊の中佐で謂わば中間管理職でしかなかった。その親衛隊（SS）の指揮下にあった国家秘密警察（ゲシュタポ）のユダヤ人移送局長官となり、数百万人におよぶホロコーストの犠牲者をアウシュビッツなどの強制収容所へ移送する

指揮的役割を担った。

ホロコーストの犠牲者にはもちろんユダヤ人が圧倒的に多いのだけど、実は国籍を持たないロマやジプシーを入れると全部で28の国々の人々もいた。ドイツ人すらいた。1人だけとはいえ中国人やエジプト人もいたと記録に残っている。ヒトラーが軍事クーデターで権力を掌握したのではなく、曲がりなりにもワイマール憲法下の民主的なプロセスの中から生まれていることを考え合わせると、人間の秘めている悪魔性について背筋が震える思いをするのはわたしだけではないだろう。

パウル・ヨーゼフ・ゲッベルス（1897年10月29日～1945年5月1日）

次にわたし達が知っている名前は、ナチ党の宣伝大臣（正確には国民啓蒙・宣伝大臣）のゲッベルスだろう。

1924年に彼が政界に出た時には、反ヒトラーだったのだが、ヒトラーの方は彼の特に演説の才能を高くかっていた。20代後半の青年だった彼が政治家になろうとした背景には、第一次大戦後の賠償



金返済とドイツ国内のハーパーインフレによる経済的困窮に加え、民族としての誇りを見失っていたドイツ国民の心理的な混乱を反映して、国政もまた昏迷状態が続いていたことにあった。

1928年に内閣が倒れた後の総選挙で、弱冠31歳でナチ党から国会議員に初当選している。この時は国会に議席を持つ政党の数だけでも15（ドイツ社会民主党、ドイツ国家人民党、中央党、ドイツ共産党、ドイツ人民党、ドイツ民主党、ドイツ中産階級帝国党、バイエルン人民党、国家社会主義ドイツ労働者党＝ナチ党、キリスト教国家農民及び農村住民党、公民権及びデフレのための帝国党、ドイツ農民党、農村同盟、ドイツ＝ハノーファー党、ザクセン農民）もあり、その他にも議席を持たない諸派が存在していた。

その時のナチ党はまだわずか12議席を有する弱小政党でしかなかった。しかし、比較第1党のドイツ社会民主党も153議席で過半数を有しておらず、結局ドイツ社会民主党を中心とする連立政権で組閣された。少数与党の混乱が続く中、翌1929年に始まった世界恐慌によって、議員内閣制は維持できなくなり、大統領が首相を指名する大統領内閣制に移行し、ヴァイマル共和政の議会制民主主義の終焉を迎えている。

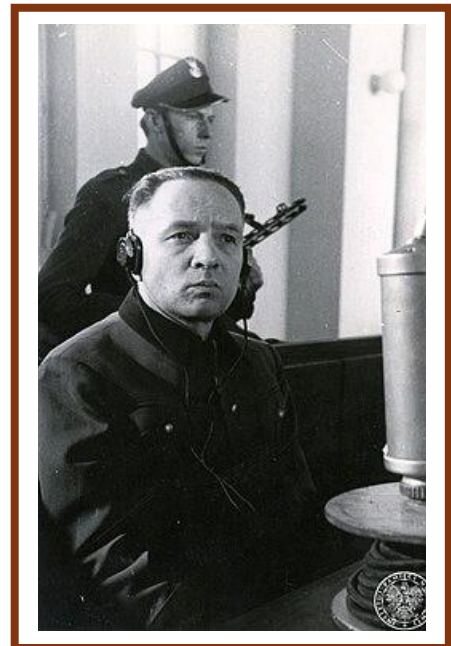
政治家としてデビューした後は、ヒトラーが見込んだ通り、数々の演説を通して急速に頭角を現しナチ党における中心人物の一人となった。ナチ党のプロパガンダを積極的に広め、ヒトラーの強制的同一化主義（反ユダヤ主義）を推進するとともにナチ党の勢力拡大に貢献した。ゲッペルスはヒトラーの右腕とまで呼ばれるようになり、第二次世界大戦の敗戦の直前、ヒトラーの遺書によってドイツ国首相に任命されている。もっともゲッペルス自身はヒトラーの後を追ひ、家族を蜜連れに自殺した。

ルドルフ・フランツ・フェルディナント・ヘス（1901年～1947年）

ルドルフ・ヘスといってもナチ党の副総裁だったヘス（後述）とは別人。親衛隊の中佐として、アウシュヴィッツ強制収容所の所長を務め、アイヒマンの指揮の下、移送されてきたユダヤ人を中心にしたホロコーストの犠牲者たち400万人以上の虐殺に当たった。

繰り返しになるが、ホロコーストの犠牲になったのは実はユダヤ人だけでない。ナチスが侵略したあらゆる国から合計28もの民族がこの収容所に送られ虐殺されている。敵対していた米国人、イギリス人、フランス人の捕虜はもちろん、ロマやジプシー、パレスチナ・ユダヤ人といった当時国籍のない民族もその中に含まれていた。

ドイツ敗戦後に逃走潜伏しているところを発見されニュルンベルク裁判で死刑を宣告された。その後、ポーランドに護送されて自分が所長をしていたアウシュビッツ収容所内に彼のために作られた絞首台で絞首刑に処せられた。



ルドルフ・ヴァルター・リヒャルト・ヘス（1894年～1987年）

もう一人のヘスは、国家社会主義ドイツ労働者党副総統、ヒトラー内閣の無任所大臣だが、陸軍の最終階級は予備役少尉である。しかし、親衛隊（SS）の名誉指導者であり、親衛隊における階級は大将だった。



ヘスはヒトラーから第2後継者の地位を与えられるなど信任が厚かったのだが、親衛隊大将の身分にありながら1941年6月22日、ドイツ国防軍が突如ソ連に侵入したバルバロッサ作戦の直前の5月に、ドイツ空軍のメッサーシュミットBf 110という双発の重爆機を自ら操縦して飛び立ち、イギリスのグラスゴー郊外に不時着している。

元々、精神的に抑うつ傾向が強く何度もうつ病の治療を受けていたようだ。捕虜としての幽閉生活の間に精神に異常をきたしてしまい、ドイツ敗戦後のニュルンベルク裁判ではゲーリングなど旧知の盟友たちに引き合わされても、「記憶にない」「誰だか分からない」と証言している。しかし結局、終身刑を宣告され、ベルリン市内のシュパンダウ戦犯刑務所に収容されていた。1987年8月

17日、93歳になったヘスはシュパンダウ刑務所内で電気コードで首を吊り自殺している。21世紀の今日、ドイツだけでなく米国などにも出現したネオナチたちの信奉的になっている。

ヘルマン・ヴィルヘルム・ゲーリング（1893年1月12日～1946年10月15日）

ゲーリングはナチ党の最高幹部として、ヒトラーから総統としての後継者に目されるほど信頼されていた。第一次世界大戦でエース・パイロットとして敵味方なく名声を誇っていた。第2次大戦ではドイツ空軍総司令官となり、さらに全ドイツ軍で最高位の国家元帥に任じられている。

第一次大戦後にナチ党に入党、1928年に国会議員に初当選し、1932年の選挙でナチ党が第一党となると、国会議長に選出されている。党と上流階級の橋渡し役を務めてプロイセン州首相、航空相、ドイツ空軍総司令官、四カ年計画全権責任者、ドイツ経済相、森林長官、狩猟長官などの要職を歴任し、遂にはヒトラーの後継者に指名されている。

しかし、政治的には対外穏健派だったため、強硬派のヒトラーと徐々に距離ができ、第二次世界大戦中、ドイツ空軍の劣勢が目立つようになると、ナチ党内での存在感を落としている。第一次大戦の名声もあって、ドイツの外交に



国家元帥の正装姿のゲーリング。彼の人生最高潮

活躍したこともあったが、やがて強硬派のリッペントロップにその地位を取って代わられた。それでも戦後のニュルンベルク裁判では最も主要な被告人の身ながら自らを弁解することなく、ヒトラーとナチ党の理念を擁護して検察と対決して注目を浴びている。死刑判決を受けた後、独房内で服毒自殺した。

ウルリヒ・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨアヒム・フォン・リッペントロップ（1893年4月30日～1946年10月16日）



ゲーリングのライバル、リッペントロップはヒトラー内閣の外務大臣（1938年から1945年）。ニュルンベルク裁判により絞首刑に処せられた。親衛隊大尉で大戦を生き延びたルドルフ・フォン・リッペントロップは長男。

リッペントロップの名前にあるフォンとは、ドイツ語圏で王侯・貴族や準貴族（ユンカー）の姓の初めに冠する称号として使われる。名前の通り、彼はドイツの貴族出身だった。そのため、広くヨーロッパの貴族たちとの交流を通して、外交官としての経験もあったため、ナチ党への入党が1932年と遅かったにもかかわらず、ヒトラーはリッペントロップを重用するようになる。そのことから同じく外国で有名でありながら、貴族出身ではなかったゲーリングとその仲間からは良く思われていなかった。

ドイツの無条件降伏後、ニュルンベルグ裁判の際に行われた知能検査（IQ＝平均100、偏差値15）では129と評価されていた。しかし、上流社会の御曹司としての出自にありがちな通り、能力については裁判で尋問に当たった検事たちの失笑を買うほどの程度だったことが記録に残っている。本来の知能と経験がものをいう政治的な能力には乖離があるということが、実証されて興味深い。

ゲーリングが処刑前に自殺したため、裁判で死刑を宣告され最初に絞首刑に処されたのがリッペントロップとなった。

ハインリヒ・ルイトポルト・ヒムラー（1900年10月7日～1945年5月23日） ヒムラーは親衛隊のトップとして治安・諜報などで強大な権力を握り、国内の統制と反ナチ勢力、ユダヤ人への迫害の立案と施行を指揮した。

ホロコースト（ユダヤ人絶滅政策）はヒムラーの発意ではなくアドルフ・ヒトラーによるものではあった。しか



し、ヒトラーが1941年にホロコーストを決意したあと、ヒトラーの命令を直ちに実行に移し、実際にホロコーストを計画したのはヒムラーであった。

1944年7月20日に総統大本営内でヒトラー暗殺未遂事件が起きると、ヒムラーは逃亡した容疑者の追跡のための権限などを利用して自身の地位と権限を強大化させている。

現代の歴史家の中にはヒムラー自身が暗殺計画の黒幕だったとか、少なくとも計画を知っていて黙認していたという憶測も飛び交っている。

1945年5月7日、ヒトラーの自殺と共にドイツが無条件降伏すると、ヒムラーは髭をそるなど変装して逃亡した。5月22日にイギリス軍に拘束された。始め自分を「野戦憲兵曹長ハインリヒ・ヒッツィンガー」と称していたが、翌日には一般的な捕虜としての扱いに耐え切れず本名を名乗って出た。それでも自分の考える名誉ある扱いは受けられなかったことから、待遇に抗議のためだったか、それとも絶望したかは不明だが、結局、口の中に隠し持っていた青酸カリによって服毒自殺した。

インハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ（1904年3月7日～1942年6月4日）



金髪の野獣と呼ばれ部下たちからも恐れられていたハイドリヒは、親衛隊での階級は親衛隊大将兼警察大将だが、軍人としての階級は空軍少佐、海軍中尉だった。ヒトラー直属の部下として冷酷無比な辣腕を振るい、秘密国家警察（通称ゲシュタポ）の長官として、ドイツとドイツの占領下にあった地域にゲシュタポの活動範囲を拡大させている。

ゲシュタポは1933年に当時、プロイセン自由州の内相だったゲーリングがプロイセン秘密警察として発足させたものだが、1934年にヒムラーとハイドリヒが指揮権を握ったことから、権力を強大化させている。

親衛隊 (SS) に12ある本部の一つで、ドイツ本国およびドイツ占領地の敵性分子を諜報・摘発・排除する政治警察機構の司令塔だった、国家保安本部 (RSHA) の事実上の初代長官としてドイツの政治警察権力を一手に掌握した。1941年7月31日以降はゲーリングから「ユダヤ人問題の最終的解決」の委任を受け、「ユダヤ人問題の最終的解決計画＝ホロコースト」の最高司令官とも言うべき存在としての実質的な推進者でもあった。

大戦開始後、ヒトラーの命令によってドイツ軍の武器の主要な調達先であったチェコのベーメン・メーレン保護領の統治に当たっていたが、1942年5月27日イギリス軍の諜報機関の支援を受けたチェコ人とスロバキア人により、銃撃と手りゅう弾による攻撃を受け、その傷がもとで6月4日に死亡している。使われた手りゅう弾にボツリヌス菌が仕込まれていたという説や、ハイドリヒの権力増大によって自らの地位を脅かされることを危惧したヒムラーによって、適切な治療がなされなかったという説もささやかれている。